
王たちの宴 S e c o n d 神王編

スギ花粉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王たちの宴

S e c o n d

神王編

【Nコード】

N 4 8 3 2 J

【作者名】

スギ花粉

【あらすじ】

ある日・・・少年は運命の出会いをする。様々な人との出会い・・・それがいつたい少年に何をもたらし、その中でどのような決断を下していくのか？

これは・・・王たちの宴・・・をある程度読んでいただく分かりますか？と思います。しかしこれ単体でも読めるように作っております。ぜひ、楽しんでください

プロローグ（前書き）

これは本編・・・王たちの宴・・・をある程度読んでくれたほうが分かりやすいと思います。ですが、これ単体でも十分楽しんでいただけたらと思いますのでどうぞ。

プロローグ

「この無能者が……さっさと辞めてしまえ」

「お前のせいで私たちまで、落ちこぼれ扱いされたらどうするとい
うの？」

「田舎者」

「はずかしくないのか？」

「……人間とは不完全な存在だ」

「魔法もマトモに使えないのか」

「浮浪者のようだわ……ああ……やだやだ」

「気持ち悪いのよね……こっちに来ないでよ」

「……神がこの世界を造り、人間を創造したという」

「貧乏人が」

「臭いんだよ」

「平民風情が生意気な」

「……だが、神は助けてもくれない……こんなにも、
辛いのに」

「ただでさえ男」

「使えない」

「お前なんて………生まれてこなければ」

「『『『『『死んでしまえ』『』『』『』』」

手を差し伸べてくれぬ神など………必要ない!!

プロローグ（後書き）

誤字・脱字ありましたらよろしく願います

プロローグ（前書き）

えゝゝ前の話は何のことか分からないと思います。ここからが、本編みたいなもんです。楽しんでいただけたら幸いです・・・

プロローグ

毎日毎日が同じことの繰り返しだ。特別な事などありはしないのだ。だが、その日はいつもとは違っていた

「名はなんという??」

その日はいつもと同じ、雪の降る寒い日だった。神聖帝国の北部では雪は降らない日の方が珍しい

そんな中知らない男が、いきなり自分に話しかけてきた。

「……ジョン」

自分は、橋の下で目を覚ましたばかりだ。

そしていつものように、ゴミ箱を漁って今日の食糧を確保しようとしていた所だった

「ふむ。ジョン……お前…両親は何をしている」

「知らない……いないと思う……昔から橋の下で暮らしているから」

と、ジョンは正直に答える。

「ふむ……ジョンか……ジョンね」

何やら顔に手をついて考えている。ジョンは少し注意深くその男を観察してみた。

茶色い髪を短く刈り込んでいる。身長は180近くあるだろうか……スラッとした印象を受ける。

どこにでもいそうな男だ。特徴がないともいえる。

そして着ているものは、高そうなものばかりだ。きっと金持ちなのだ……もしかしたら貴族なのかもしれない。

そんな事を考えていた時、ある不安が頭をよぎる。

（もしかして……これが人さらいというものなのかもしれない）

確か、橋の下のロビー爺さんがいった。彼らは子供を連れ去って奴隷のような扱う。そして、使えない子供は魔法使いの生贄にされてしまうのだ。

すごい怖いから、絶対近づいちゃだめだって。

………けど………この人はあんまり怖くない。

「ルーウィン……どうした？行くぞ」

そこに、路地裏からもう一人自分の前に現れた。

その人物は筋骨たくましい男だった。髪は頭にまったくない。

そして腰に剣を吊るしている。すごく強そうだ………兵士か何かなの

かもしれない。

こっちは人は怖そうだ。

「ダリオン、こいつを見てみる」

と、自分を指さすルーウィンと呼ばれる男。

「チつ、捨て子か。あっちへ行け！！何もやらんぞ！！」

と、いきなり怒られた。ジョンの体がびくつと跳ねた。

（や、やっぱり怖い……………逃げるべきだ……でも、足が震えて動かない）

ジョンはカタカタつと震えている

「ダリオン、まあ待て。怯えておるではないか……………ここは私に任せておけ」

そっついながら、ジョンに近づくルーウィン。

そして、しゃがみ込んでジョンと目線の高さを合わせる。

「ジョン……一回しか聞かんぞ……………私たちと一緒にくるか？」

「ルーウィン！！何をいってる！！」

大声を出すダリオンという男を、手で制す。

「どうだ？ ジョン？ 私たちと共に来れば、こんな所とはおさらばだ。そして暖かい家…おいしい飯がお前を待っている。さあ……よく考えろ」

と真直ぐに自分を見ている。

ジョンは一生懸命に考えた。暖かい家なんて想像もできない。街の人が薄着で家の中にいるのを窓からのぞいた事しかないのだ。

でも……こんなうまい話があるのだろうか？自分を騙しているのではないか？

様々な考えが浮かんでは消えていく中で、一生懸命考える。こんなに真剣に考えたのは生まれて初めてかもしれない。

そして……

「……………行く」

なぜか、そう答えていた。

「ほう。なぜかな？飯がもらいたいかからか？寒いからか？」

と、先ほどのやさしい表情ではなく、厳しい顔をして問う。

凄まじい威圧感に逃げ出したい衝動にかられた。先ほどまでは、ダリオンと呼ばれる男の方が怖いを思っていたが、今はルーウィンと呼ばれる男の方が怖い。

そんな中…ジョンはこの男に会った時から、感じていたことをいつていた。

「えつとね……あの……その……」

「聞こえんぞ……大きな声でいってみよ」

「……お、大きかったから!!」

ジョンは勇気を振り絞った。

「何が？」

と、怪訝そうにするルーウィンという男。

「わかんない……でも……でも……大きい……から」

ジョンは自分の感じてることを、必死に言葉にしようとした。

だが、うまい言葉が見つからない。

一生懸命に考えるジョンを、にやにや、と見つめるルーウィン。

「ふむ。おもしろい!!ダリオン……こいつは、私が連れて行くぞ!!」

「ルーウィン!!何を馬鹿なことを!!気でも狂ったのか?こんなどこにでもいるような孤児を拾ってどうしようってんだ？」

「もう決めた。こいつは私が連れていく」

それを聞き、勝手にしろ!!と、ダリオンは先に歩き始めてしまう、

「ああ。自分の思うがままに生きないと・・・つまらない」

そういうと、この寒い中。

わざわざ手袋をはずし・・・自分に手を伸ばしてくるルーウィンという男。

ジョンはその手を見て・・・ゆっくりと・・・自分の手を伸ばし

プロローグ（後書き）

誤字・脱字ありましたら。

感想・アドバイスを待ってます

目覚め（前書き）

えゝゝ楽しんでいただけてるでしょうか？スギ花粉です。読みにくいかもしれませんが・・・よろしく願います。神王編は、1話ずつですかね。では・・・どうぞゝゝ

目覚め

自分は目を覚ました。木目の天井が見える。

また……あの夢だった。

あの日以来……幾度となく見た夢。この夢を見るたびに心が引き締まるような気持ちになれる。

むくつとベットから起き上がると、眠い目をこすりながらテキパキと着替えていく。

まだ、日が昇る前であり。外は薄暗いままだ。

毎日毎日この時間帯に起き、準備を整えておくのが自分の役目だ。

井戸へ向かいその日使う水を用意する。

台所へ向かい、パンを作り、スープを作る。

朝食の用意ができれば、雑巾をもって屋敷の中を掃除するのだ。小さな自慢だが、埃一つ自分は見逃さないのだ。

もう、3年続けているので慣れたものだ。

それが終わるころには、ちょうどルーウィン様が起きだしてくる時間になる。そこで、部屋の前で待機しておく。

ジョンは急ぎ、入口へ向かい扉をあけと、そこには、筋骨逞しい
壮年の男が立っていた。

「いらっしやいませ。ダリオン様」

と、ジョンは挨拶をする。

「遅いわ!!小僧!!もっと早く来られんのか!!」

と、いきなり罵声を浴びせてくる。

ダリオン様にとっては、これが当たり前だ。

「申し訳ありません」

「ふん!!」と鼻をならす。

ジョンは朝言われたとおりに、ダリオン様をルーウィン様の元へと
案内する。

「おお、よく来たダリオン。待っていたぞ」

と、嬉しそうに喋るルーウィン様。

「ああ、久しぶりだな。ルーウィン」

「ジョン。私たちは少し長く語り合う。だから、夕方になったら夕
食を運んでくれ」

「かしこまりました」

ジョンはそういうと、扉を閉め、階段を降りて行く。

二人は昔からの長い付き合いであるらしい。

今でもよく、二人で旅に出たりを繰り返している。

旅の目的はジョンは、知らない。知らなくていいとも思っている。その間はジョンが、この屋敷の管理を任されている。

いつ主が戻ってきてもいいように、常に掃除・洗濯・料理もかさない。

これが自分の与えられた役目だ

夜

すでに夜遅くになっていた。

ダリオン様とルーウィン様は未だ奥の間から出てこない。

夕食はすでに届けたが、ここまで長い話をジョンは、初めて経験した。

夜食を届けようか、ジョンが真剣に悩んでいると、奥の間の扉がバツンと大きな音とともに開いた。

ルーウィン様がドタドタと台所に走ってくる。

「ジョン！！旅の準備をしろ！！出かけるぞ」

「かしこまりました。今回はいつ頃お戻りでしょうか？」

「いや、今回は戻らん。それと、お前も旅の準備をせよ」

「????」

ジョンはルーウィン様の言ってる意味がよく分からなかった。

「始まるぞ……………ついに……………な」

アハハハハハと高笑いをするルーウィン。

ジョンが普段、目にしているルーウィン様とは明らかに雰囲気が違う。
違った。

目覚め（後書き）

誤字・脱字ありましたら・・・
感想・アドバイス待ってます

役目

「は!!」 「は!!」 「は!!」 「は!!」

軍の野営地の端の方でジョンの気合いの入った声が響く

槍を構えて、見よう見まねでブンブンと振り回している。

その槍は一般兵が持つもので、近くに訓練ように用意してあるものである。

「は！！！！」
「は！！！！」

今、ジョンが槍の訓練をしているのには……ある理由がある。

旅

ジョンは何が起きているのか分からなかった。

いつも、お二人での旅のはずなのに・・・なぜ今回は自分も一緒なのだろうか？

そんな疑問を抱きながら、どんどん西へと向かい森の中へと入っていく。

ジョンが旅をしてたどり着いたのは、多くの兵隊が集まっている軍

営であつた。

そこで、ダリオン様は早朝から、夕方まで毎日毎日多くの兵士の訓練を繰り返していた。

ルーウィン様の元には、毎日毎日様々な人が会いに来ている。

農民、兵隊、商人らしき人、……貴族らしき人まで……それこそ老若男女の区別なく。

全員がルーウィン様と会えたことを、喜んでいた。

時には涙を流している人もいる。

自分にはどういふ事なのか、まったく分からない。

ただ………

お二人が急に遠くへ行ってしまったような気がした。

調理をする担当の人がいるらしく、朝・昼・晩と料理も勝手に出てくる。

ジヨンはすることがなくなってしまった。

そこで………自分なりに一生懸命にできることを考えてみることにした………

今、この軍営にはたくさんの兵士がいる。

戦でも始まるのかもしれない。

そして、ダリオン様はその兵士を鍛えている。つまり、この人たちはダリオン様の兵なのだ。

戦のことはよく分からないが、人数は多い方がいいに決まってる。

それなら、自分も兵士になれば……役に立てるかもしれない

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

今

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

見よう見まねで、槍を振り回していると、

「小僧!」と、

軍の野営地にダリオン様の怒号が響く……

ものすごい形相で、ジョンに近づいてくる。

傍に立ち、ジョンを上から見下ろす

「何をしている?」

「訓練をしています」

ジヨンは正直に答えた。

「なぜだ？」

「自分も兵のように戦いたいのです」

と、いった瞬間。

ダリオンがジヨンのことを思いっきり地面に叩きつける。

「小僧！！戦場にも出たこともないようなひよっこが、わかったよ
うな口をきくな！！」

地面に叩きつけられたジヨンは、すぐに立ち上がり直立する。

それをまた、拳で顔を殴りつける。

ジヨンはそのまま、2メートルほど吹っ飛んだ。

だが、その飛ばされたその先で必死に立とうとするジヨン。

ダリオンはその顔を蹴りつける。それを何度も何度も・・・繰り返す。

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

ダリオンは息を切らす。

ジヨンはまるでボロ雑巾のようになりながら、近くに転がっていた。

「はぁ・・・わかったか、小僧。戦場とは命を懸けて戦う場所だ。子供のお遊びじゃないんだぞ!!」

ダリオンは息をふー、と吐くとその場を去ろうとする。

それが、ピタッとその場に立ち止まると、ゆっくりと振り向く。

そこには、槍を杖がわりにしながら必死に立ち上がったジヨンの姿があった。

口から血を吐きながらも、何とか言葉をつむぎだす。

「・・・自分は・・・ごほ・・・文字も読めません・・・ただ、いるだけです・・・」

自分だって!!・・・ルーウィン様や・・・ダリオン様の・・・

お役にたきたいんです!!・・・」

「生意気な!!」

ダリオンが、踵を返すと槍に寄りかかりながら立つジヨンを叩き伏せようとする。

「待て!!!!」

ピタッと、拳を止めるダリオン。

「ルーウィン」

ダリオンを止めたのは、ルーウィンの一声であった。

ダリオンとジョンの元へ、護衛に守られたルーウィンが近付いてくる。

その顔はおもしろそうに、にやついている。

「ダリオン、よく見てみる。ジョンはすでに・・・・・・・・・・気絶しているぞ」

ダリオンは、ぱつと振り返る。

そこには、直立しながら白目をむき、気絶しているジョンの姿があった。

「ちつ・・・・・・・・・・本当に馬鹿な小僧だ!!」

悪態をつくダリオン。

「くくくく、真直ぐな子供ではないか？純真で一生懸命だ・・・・それに・・・・才能はあるのだろ？」

「・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・実際、さっきの素振り・・・・・・・・・・ただ者じゃない、天賦の才があるやもしれん。それに・・・・・・・・・・」

ダリオンにしては珍しく、悪態の一つもなく褒める。

「何だ？」

と、怪訝そうにするルーウィン。

「…………魔法の……才もあるやもしれん」

非常に言いにくそうに、言葉を紡ぐ。

「……………そうか」

ルーウィンは少し、遠くを見るような目を見ると、考える素振りを見せる。

「ダリオン」

「何だ？」

「教えてやれ………武術も………魔法もな」

「……………いいのか？」

ダリオンは少し、気遣うような素振りを見せる。

「良い…………こいつには…………私のようになってほしくない」

「……………分かった」

ルーウィンとダリオンは、しばらく黙ったまま気絶しているジョンを見守っていた。

宗教反乱（前書き）

えゝゝ楽しんでいただけてるでしょうか？もうすぐです。

宗教反乱

ジョンはこれだけの人を、一度に見たことはなかった。

それに・・・全員の雰囲気が・・・何かおかしい

全員が熱があるようにボーっとしているのだ。

ジョンは、その異常な光景に恐怖を感じずにはいらなかった。

始めは軍営を出て、いつもの兵士と共に進軍していただけだった。

だが、進むにつれて兵士の集団が1つ2つと加わっていき、瞬く間に大軍となった。

さらに、進んでいくと、兵士ではない集団も加わってきた。

手に手に、鍬や棒などをもった・・・明らかに兵士ではない者ばかりだ。

だが・・・その人数は半端な数ではなかった。

彼らは信者と呼ばれている。

どういった者たちかなのか、ダリオン様に聞いてみた。

「ルーウインを、崇拝している奴らだ」といった。

自分もルーウイン様を守りたいと思っている。

ルーウィン様は、高台へ登るとゆっくりと両手を広げて、天を仰ぎ見る。

静かなる沈黙が、闇夜に伝わる。

どれらいの時が経ったのか？永遠のような気もするし、一瞬のような気もする。

ルーウィンが、両手を下ろし。闇夜のある方向を指さす。

「我が子らよ、次はトーレンへ向かえ。向うのだ。そこにも悪しき気が満ちている。それを打ち払わない限り、未来はない。我が子らよ、そこで待つのだ」

シン、と静まり返ったところに、ルーウィン様の声が響く。

「トーレンへ・・・」

誰かがつぶやいた。

それが、どんどん広がっていく

「トーレンだ」「トーレンへ行くぞ」「トーレンへ！・・・」

「・・・トーレン！・・・」

トーレンと城外から声が上がりはじめた。

次が上がった声はすでもう闇をうるわせるほどに大きくなっていた。

万を超える信徒たちが、進み始める。

ジョンはそれに、凄まじい恐怖を感じた。

[illegible]

ルーウィン様に戻ってきた。

「いやー疲れるものだ。あんなもの、やるものではないな。毎回思うが、寿命が縮んでしまいそうになる……」

ルーウィン様はすでにいつものルーウィン様だった。

「どうした、私の顔に何かついてるか？」

ジョンは一度でいいから、聞きたいと思っていたことを聞くことにした。

「ルーウィン様はなぜ、反乱を起こされたのですか？神のお告げがあつたのですか？」

ルーウィンは、アハハハツハ、と笑いながらいった。

「これは神のお告げなんかではない」

そこで、酒をぐいっと飲んでいう。

「人が集まった。戦ができると思った。そして多くの者が希望を欲しがっていた。私はそれを与えただけだよ……そして神聖帝国を相手に選んだ」

アハハハハハ、とルーウィンは大笑いした。

「思うさま生きてみないと損だ。思うさま生きられる。それだけで、生きている意味がある、と思おうではないか」

ルーウィンの笑い声だけが、部屋へと響いた。

ジョンは思う。

ルーウィン様は、すごい方だと思う。

自分は信者ではない。

いまいち宗教というものが、理解できないところがある。

それでも、ルーウィン様の役には立ちたいと思う。

近くにある槍を強く握りしめる。

学がない自分にできる唯一のこと。

死んでも、ルーウィン様を守りぬくこと……これが自分に与えられた役目だ。

ジョンは心に、決意を固めるのであった。

宗教反乱（後書き）

誤字・脱字ありましたら

感想・アドバイスを待ってます・・・励みになるので

初めて（前書き）

えゝゝ楽しんでいただけてるでしょうか？いないと思いますが・
神王編のみでも話は通じます。仮に、將軍と傭兵誰やねん？という
人は・王たちの宴・本編をお楽しみください・

初めて

ダリオン様との早朝訓練がはじまってから、すでに1月あまりがたっていた。

槍を中心に教わっている。

始めは手も足もでないジョンであつたが、最近では何とかダリオン様の手加減してくれている稽古にもついていけるようになっていた。

さらに驚いた事に、魔法使いの人に魔法まで教えてもらった。ダリオン様の話では自分には大量の魔力があるらしい。

半信半疑だったが、魔法使いの人の言った通りに集中してみると自分の中に燃えるような魔力がある事が分かった。

何度も何度も練習を重ね、身体向上の魔法、武器への魔力注入、放出…そのすべてができるようになった。

魔法使いの方は驚愕の表情をしていた。

「ありえない……こんな短期間に…」

とつぶやいていたが、自分などに気をつかう必要などないのにと考えた。

ある日…ダリオン様に呼ばれた。急いで駆けつけると、ダリオン様

直属の5千の部隊もいた。彼らは特にダリオン様に鍛えられている部隊であり、最精鋭なのだ。

そんな中、ダリオン様は自分に成果を見せてみろつと言った。

自分は手に炎の魔力を集中し、一際大きな火の玉をつくり、大木に向かって放った。その大木は炎に包まれ、球体がぶつかった衝撃でドシューーン！と倒れた。

それを見て周囲でどよめきが上がっていたが、気にしなかった。思ったのは、これでお二人のお役に立てるということだけだ。

ダリオン様が唯一褒めてくれたのも、この時だった。

ダリオン様は早朝以外は忙しいらしく、稽古はつけてはもらえなかった。

ルーウィン様も信者の方と会っているので、夜にならないと戻らない。

だから自分は朝から夜まで体を苛め続けた。自分にはこれしかないのだ。せめて、人並にならなくては、ならない。

そして、明確な目標ができてから、さらに頑張れるようになった。

自分が目指すもの……それは、ルーウィン様を常に守っている護衛隊に入りたいということだった。

一度、ダリオン様に話したことがある。

というような内容だった。

（この人たちは、何を言ってるんだろう？あの身のこなしや、この威圧感からただ者でないことなんか丸わかりなのに……）

その二人は、ルーウィン様とダリオン様と話をしているらしい。

自分には関係ないと、いつものように鍛練に励んでいた。

そして自分が呼ばれた時は本当に驚いた。

いったい何の話だろうか？

將軍と赤き狼

〓 〓 〓 〓 〓 〓

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「この子かい？」

と黒髪の青年が、ダリオン様に話しかけている。

「ああ……その小僧だ」

ダリオン様は自分を見て云う。

黒髪の青年は、驚いたように自分を見ている。

「本当に1か月なのか？相当の実力だと思っけどね」

「だが、事実だ。正直……俺ではもう手に負えない」

「……………槍か？」

と赤髪の人が、一言いう。

「ああ……槍を基本的に教えてやってほしい。できれば、魔法もな」

（いったい、何の話をしているんだろうか？）

ジヨンは緊張しながらも、混乱していた。

「槍なら、当然レンの担当になるだろうね。どうだ、レン？」

「……………過酷だぞ？」

「ふん……結構だ、根性だけはあるからな」

ダリオン様は、鼻を鳴らす。

「……………いいだろう。引き受けよう」

「決まりだな」

ダリオン様は他人には分からないが、確実にうれしそうな顔をした。

それが、自分に初めての師匠ができた瞬間だった。

初めて（後書き）

誤字・脱字ありましたら・・・ご意見・感想待ってます。励みになるので

聞きたいこと（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？ではどうぞ〜

聞きたいこと

「…………ハア…………ハア…………ハア」

今、ジョンは魔王城の鍛錬場で仰向けに倒れている。朝のレン師匠の鍛錬は、非常に厳しい。

前日より確実にきつい鍛錬となっているのだ。死に物狂いでやらないと、鍛錬しないぞとレン師匠からは言われているから、必死だった。

さっきカイ師匠が自分に針を打ってくれた……………すると不思議な事にすぐに疲れが抜けていく。

不思議に思っただけでも針をさしてみたが、血がただけだった。きつと特殊な技術なのだろう。

カイ師匠はなんと異世界の方なのだ。そんな世界があるなんて、自分には想像もつかない。

初めは槍だけを教えてもらうはずだった……………しかしカイ師匠が体術もやってみないか？と言ってくれた。

自分も体術には興味があった。槍が折れた時などに絶対必要だと思うのだ。だから自分からも頼み込んだ。

しかし、それを聞いたレン師匠がカイ師匠と一度喧嘩をしてしまった

「……………ジョンは俺の弟子だ」

「い、いいじゃないか…俺もジョンに教えたいんだよ」

ジョンはすぐに二人の間に入った

「け、喧嘩はダメです！！」

それを見て、カイ師匠とレン師匠は顔を見合わせて、照れたように笑いあっていた。

「……………そうだな」プイツとレン師匠は恥ずかしそうに遠くを見
てしまう

「ハハハハハハ……………いやゝゝ恥ずかしい所見られちゃったね…あり
がとうねジョン」

ワシワシッとカイ師匠が頭をなでてくれた。少し、恥ずかしい。で
も二人にはいつも仲よしでいて欲しいのだ。

カイ師匠の鍛錬は夕方だ。それまでは自由……自分なりに鍛える
時間だ。一瞬でも無駄にはできない

「……………よし！！」

と気合を入れると立ち上がる

すると……………そこに銀髪の魔族の男がいた

「おお…やっと起きたか…どうだ？疲れはとれたか？」

と聞いてきた

「…………あの…………どちら様でしょうか？」

（誰だろうか？魔族の人と話すのは初めてだ）

すると、それを聞きニヒルに笑う。

「うむ。我は…ギルバート・ジエーミソン…………魔王である」

「魔王様！！えっと、あの……………」
「ごきげん麗しゅう」

と、あわて始めるジヨン。

それをおもしろそうに見るギル。

「まあ…まあ…落ち着け。そんなに緊張する事はない…公式
の場でないのだからな。毎日毎日魔国のために真面目に働いてな…
…少し休憩しているのだ」

（そ、そうなんだ……………やっぱり王様ともなると大変なんだろうな！）

ジヨンは尊敬の眼差しをギルに向ける。

「さて……………実は少年に聞いてみたい事があってな」

「何でしょうか？」

「うむ…………少年……………神をどう思う？」

「神……ですか？」

「ああ、そうだ。この世界……大地……木々……水……生きとし生けるものを創造したという神……運命を司るという存在……人間族はそれを信仰する。まあ……ギガン族も独自の神を信仰しているが。魔族は神などを信仰せんのだ。神王の傍にいる少年に聞いてみたい……神とは何だ？」

「えっと……ですね……自分は……学もないので難しい事はいえませんが……」

「けど……何だ……？」

「会ったことがないので、分かりません」

ジョンは、はつきりと言い切った。

「……く……く……く……く……ハハハハハハ！！」

単純明快であるな……だが……真理かも知れぬ。

そう……誰も見たことがない

だが……存在するとは思っ……不思議なものだな」

「はあー」

「いやいや、興味深い話を感謝するぞ……少年」

ジョンは、何かなんだか分からず、いつまでも困惑していた

「?????」

(どういう事だろう・・・女の人が女に見えるって)

と、一人で混乱するジヨン

「良い良い・・・あの二人は夫婦ではないぞ・・・仲はいいがな。
それとな・・・レンが女であるとか...そういう事は絶対にカイや他の者に言ってはならぬぞ」

「?????.....何故ですか？」

「何故か？だと？.....それはな.....そっちの方が.....おもしろいからだ!!」

と、大声で笑う魔王様

魔王様がおっしゃっている事は、よく分からなかったが、その笑い声が楽しそうだったので、自分もいつの間にか笑っていた

聞きたいこと（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・意見待ってます

帰還（前書き）

え〜楽しんでいただけたら幸いです

帰還

今――自分は空を飛んでいるのだ

「うわわああああっああ死ぬーーーーー」

カイ師匠は叫んでいる

あんなに強いのに高いところが苦手なのが不思議だった。こんなにきれいなのに目を瞑ってしまうなんてもったいない。

「キャハハハハハハハ！！」

ジヨンは魔国に向かった時と同様楽しそうに笑う

「……………」

無言で手綱を握っているレン師匠

ぼふつと雲の中へと突入する。視界が真っ白だ……雲は何と霧のようなものなのだ。乗れるかと思っていたが、それでは落ちてしまふとカイ師匠が教えてくれた。

そして、雲を抜けどんどん高度を下げていく

すると……はるか下にだが、多くの人が集まっているのが分かる……

…神王の軍が見えてきた

と怒鳴られた

「申し訳ありません・・」

久しぶりにダリオン様に叱られる。

けど・・・自分にとってはこれが日常なのだ

[illegible]

今、自分はブンブンと槍を振り回している

武術の鍛練は毎日しなければならぬと学んだ

カイ師匠とレン師匠は、ダリオン様とルーウィン様と話している

きつと魔国と自分たちの軍の事について話しているのだ………

魔国もいっしょに戦ってくれば、きっと勝てるはずだ

その時、レン師匠とカイ師匠が出てくるのが見えた

「師匠！！」

二人に駆け寄る

「……やあ……ジヨン」

⌈
•
•
•
•
•
•
⌋

（何だか．．．元気がない．大丈夫だろうか？）

「帰ってしまったのですか？」

「ああ．．俺達は魔国に戻ることになる」

「．．．．．」

「残念です．．．でも．．また会えますよね．．．きっと．．．

．．．．．自分は魔国の皆様にも頑張っしてほしいです」

「ありがとう．．ジョン」

「．．．．．」

といって二人は去っていった。

レン師匠は、一言も喋ってくれなかった。

元々無口な人ではあるが．．少し悲しかった

帰還（後書き）

誤字・脱字ありましたら

スクエズ（前書き）

え〜楽しんでいただけたら幸いです

スクエズ

西部の首都・・・スクエズ・・・では、門を堅く閉ざし、城壁には多くの魔法使いが並んでいる。

それを数万の信者たちが取り囲み、睨みあっている。

「・・・どう思う？ダリオン」

「ふん！！見てみる、さすが西部総督である大貴族。多くの魔法使いをお持ちのようだ」

「報告では近隣の領主の魔法使い隊もかき集めたそうぞぞ？」

「馬鹿なやつだ！！ここまで予想通りに動くとはな！！そのおかげで、地方の他の城は容易く落とせた・・・ろくな奴がいなかったからな」

と、鼻を鳴らすダリオン様。

「・・・ジョン・・・お前はどっと思っ？」

と、ジョンへと質問を向ける。

「・・・戦略のことは自分にはまったく分かりません。ただ、はつきりと言えることはただ一つです。奴らにはルーウィン様に指一本触れさせません。それが自分の役割ですから・・・」

「ふん！！生意気な！！」

と一括するダリオン様。

ルーウィン様はにっこり笑い、

「信じているよ、ジョン。そうだな……人には役目がある。ダリオンには、ダリオンのやらねばならぬ事があり……私には私のやらねばならぬ事がある。私がジョンの代わりはできんし、ダリオンの代わりもできん。つまり3人でやっと一人前というわけだ」

ハハハと大笑いする……その声がいつまでも、ジョンの耳に残った。

||||| ルーウィンの役目 |||||

両陣営が睨みあい、膠着状態が続いていた。

そこにルーウィン様が前に出る。

周りをジョンを含めた護衛隊が囲むのみである。

シンッと静まり返る戦場にルーウィン様の声が、大気を震わす。

「……我こそは、神王なり！！偽りの神を信仰する異教徒どもよ……よく聞け！！魔法という悪しき力を使い、人を支配する罪深さ、万死に値する！！これより、神が天罰を下す！！」

それを聞いた城壁から、怒号が飛び交う。

「何が、神王だ！！この世界の唯一の神は、絶対神アトスだ。神に背いた愚か者どもめ、裁きを受けるのは貴様らの方だ！！魔法隊・魔法撃用意・・・あの神に背きし、大逆人を狙え！！」

城壁の魔法使いたちが、手をかざし、呪文を唱え始める。

すると大量の火の玉が、魔法使いたちの手に浮かび上がる。

「ルーウィン様！！」

ジョンは叫ぶ。

だが、ルーウィン様はまったく動じていなかった。

「ジョン・・・役目を忘れるな・・・お前がしなければならぬ事を・・・」

ジョンは自分が云われていたことを思い出す。

「・・・はい」

「放て！！」

指揮官の声とともに・・・

城壁にいるすべての魔法使いが放った火の玉が、全弾ルーウィン様めがけて飛んでくる。

あと少しで、ルーウィン様に命中するという所で………

その異変は突然起こった。

何と……あれだけあった大量の火の玉がルーウィン様の前で一斉に消えた。

ルーウィン様は何事もなかったかのように、立ち尽くしたままだ。

味方では歓声があがり、城壁では魔法使いたちが慌てふためいている。

それから何度も、火の玉がルーウィン様に降り注いだか、すべて無駄だった。

掻き消えてしまう。

そこに、ルーウィンの怒号が響く。

「愚かな……全知全能の神に、そのような悪しき力が通じると思ってたか……！」

そう叫ぶと、両手を大きく広げる

「神の力……思い知るがいい……！」

しかし……何も起きなかった

いや……何も起きなくなったのだ……

魔法使いたちがいくら手をかけ、呪文を唱えても今度は火の玉すら出なくなってしまった。

「神の力により……魔法はこの世から消え失せた！！我が子らよ！！魔法に頼り、墮落した者どもを打ちはらうのだ！！」

うおおおおと、信者が城門と城壁に襲いかかる。

何人かの魔法使いは、未だに必死に手をかざし、呪文を唱えている。

指揮官は、素早く判断し弓で信者や兵士を狙うように指示を飛ばしている。

だが、その弓の精度はひどいものだった。

ダリオン様の言っていた通り、魔法の訓練に重点を置き、弓の訓練なんて毎日やっていないのだろう。

弓は一丁一石にできるものでもない。

たまに、当たっているのも運の悪い流れ矢である。

その時、一本の矢がルーウィン様めがけて飛んできた。

それを、槍で軽々と叩き落とす。

「ルーウィン様……お気をつけ下さい。流れ矢が飛んでくるかもしれません」

「うむ。だが・・・ジョンがいれば安心であろう？私はこの西部の首都スクエズが落ちる瞬間を見ていたのだ・・・」

「・・・分かりました。矢の精度もそれほどでもないですし、5 / 6本の矢なら同時にたたき落とせます」

「ふふふ、頼もしくなったものだなジョン」

「すべては、ルーウィン様とダリオン様のお役に立つためです」

「・・・そうか」

と、それ以降は黙って、西部の首都の城壁を見つめるルーウィン様。信者が城門に、丸太をぶつけている。

もうすぐ、落ちるだろうとジョンは思った。

スクエズ（後書き）

誤字・脱字ありましたら

酒（前書き）

え〜本編よりこっちが少しの間主流になります。どっちも投稿されてたら、こっち先に読んだ方がいいかもしれません。どっちでも変わりませんが。ではどうぞ〜

酒

ジョンは今、ルーウィン様とダリオン様が酒盛りをしている所に控えて、酒を注いでいた。

神聖帝国の主力が到着するのは、どう急いでも4日後だ。

ゴーラス平原・・・・・・・・それが決戦の舞台となるだろう。

敵は18万の大軍である。それに対して、こちらはおよそ20万。

確かに兵力ではこちらが上だが、向こうは精鋭。

こちらは、武器も満足に使えない平民が多い。

不利な戦いになることは、ジョンにも理解できた。

だが・・・・・・・・この二人は何としても・・・・命に代えても護ってみせる

「名将ジョルンか・・・・・・・・」

「ああ・・・・中央の將軍の中でもやつかいな方が来てしまったな。あの方ならすでに情報を集めているだろう・・・・対策もうつてるやもしれん」

「やけに詳しいな・・・・」

少しペースが速いのではないかと、心配する。

それから二人は、戦とは関係ない世間話のようなものを話し始める。旅をして、出あった人々、風景、聞いたこともないような食べ物、ダリオン様が酔って暴れた話など……

ジョンにとっては、すべてが耳新しいものであった。

夜も更けてきたころ

「ジョン」

と、ルーウィン様が自分の名前を呼んだ。

「はい」

すぐに、返事をする。

ダリオンは、腕を組んで目を瞑っている。

少し考えていたようであったが、自分の目をしっかり見つめながら

「ジョン……私の……昔話をしようか……」

といった。

昔話

昔……神聖帝国の魔法学園に通っていたことがあったのだよ。

こんな西部の田舎者がな。普通なら貴族しかいけないような学校だ

しかも……男だ。あそこの9割が女でな。無理だと思ったよ。

だが、魔法の才能はあった。確かに、魔力は平均以上はあったのだよ

両親は大喜びだった。そこを卒業すれば、帝国の要職にはつけるかな。

恥ずかしい話、自分でも浮かっていた。まさか、自分にこんな才能がとな。

だが、それも一瞬の夢でしかなかった

確かに魔力はあった。だがな、魔法はまったく使えなかった。

笑ってしまうだろう？今は自分の能力がわかるが、昔はまったく理解できなかった

全部無力化してしまう。先生たちも、出来そこないとして見捨てたよ。

そこからが、地獄だった……

ただでさえ、女尊男卑の中。平民の、しかも魔法が使えない男

かつこの的となったな……

毎日……陰険ないじめを受けたよ

ジョン……怒ることはない。もう、昔のことだ。

まあ……今でも夢で見ることがある。

あの日々を一度も忘れたことはない……

そしてある日……濡れ衣を被せられてな

学園から追い出される羽目になった

両親はひどく傷ついた、無理をし続けたこともあって……あっけなく死んだよ

あの時ほど、神を呪ったことはない

陳腐に聞こえるかもしれないが……許せなかった

学園も、あの女どもも、神聖帝国も、神も、何もかもが……

だから……全部壊してやろうと思ったのだ

驚いたか？この大規模な反乱もな、すべては復讐なのだ

何万人も死ぬこの闘いがだ……

小さい……自らの小ささに潰されてしまいそうになる

「自分にとっては、そのような事は関係ありません。あの雪の日がすべてです」

これは、自分の本心だ。

あの雪の日……差し出された……ルーウィン様の手。

温かく、すべてを包み込んでくれた……あの手。

この気持ちが揺らぐことは……ない

「……そうか……もう、何も言わない」

と、なぜか悲しそうなルーウィン様。

そこで閉じていた目を開け、ダリオンがこちらを見つめる。

「小僧……お前も飲め」

「いえ……自分などは……」

「いいから飲め!!」

そう云ってグラスを、押し付けてくる。

「はぁ……」

（……ダリオン様……何でそんなに悲しそうのですか……）

他人が見れば、ただ怒鳴っているだけに見えるだろう……

だが………ジョンには分かってしまうのだ

トクトクと赤いワインが注がれていく。

「さあ！！飲まんか！！」

ではと、何の疑いも抱かずグラスのワインをごくごく飲みほす。

グラッ

急に、視界が揺れた。

酔いではないことはすぐに分かった。

（ぐ………もしや、毒か？ダリオン様とルーウィン様があぶな……
・・）

と、二人の方を見るが、二人はまったく影響があるようには見えない

「ジョンよ………許せ」

ルーウィンの悲しそうな声が響く

ジョンの意識はそこで闇へと落ちて行った。

酒（後書き）

誤字・脱字ありましたら。感想・ご意見待ってます

あれから（前書き）

えゝゝ楽しんでいただけてるでしょうか？ぜひ読んでください

あれから

ばつと、起き上がる

「・・・ここは？」

知らない部屋だ・・・ここは・・・どこだろう？

「気がついたか？」

「カ、カイ師匠？どうして、こんな所へ？」

目の前にカイ師匠がいる・・・どうして・・・魔国に帰ったはずなのに

「・・・目を覚ましたのか？」

そこに槍をもったレン師匠も現れる。

「ああ・・・鉄針を刺しておいたから、しびれ薬の効果もそろそろ切れるはずだ」

「しびれ・・・薬？」

「・・・針？・・・じゃあ・・・カイ師匠は・・・助けてくれたのか？」

「・・・意外と冷静だな」

「違う・・・まだ、頭の回転が追いついていないだけだ。だんだん理解できるようになる」

「・・・・・・・・」

自分は・・・・・・・・西部の平原にいて・・・神聖帝国と・・・

「!!!!!!」

ベットから飛び出そうとする

だが、足が思うように動かない、纏れて倒れてしまう。

それでも、腕で這ってでも扉に向かおうとする

「落ち着け。まだ、完全に薬は抜けていないんだ。」

カイ師匠が話しかけてくれる、だが・・・今はそんな事どうでもいい

「あれから・・・・・・・・あれから・・・どれだけたったのですか!!」

自分は足を引きづりカイ師匠に近づいて行く

そして絶望的な答えが返ってくる

「ジョンは1週間寝てたんだよ」

「い、一週間・・・・・・・・」

そこで、カイに掴みかかるジョン。

「どうなったのですか！！ダリオン様は？？ルーウィン様は？？、
神聖帝国の軍勢が・・・・・・」

「・・・・・・」

あくまで冷静に徹するレン師匠。

「すべてを話そう。そう・・・・・・すべてをね」

悲しそうな目をするカイ師匠を見て、心がざわめくような、不吉な
予感が止まらなかった。

あれから（後書き）

感想・意見待ってます

ルーウィンとダリオン（前書き）

えゝゝここからが神王編の真骨頂です。楽しんでください

ルーウィンとダリオン

「・・・・・・・・・圧巻だな」

「ああ」

ルーウィンとダリオンが見守る先には、神聖帝国の精鋭18万が、きれいに陣形を組んでいる。

太陽をやさしく抱える女神・・・・・・・・・アーツ神の旗が所々になびいている。

ゴーラス平原の少し小高い丘となっている所で、自らの敵と向かいあっている。

「・・・・・・・・・ジョンには悪いことをしたな」

「ふん！！これは、俺たちの闘いだ。小僧には関係ない」

そう悪態をつくダリオンを、ルーウィンは微笑ましく見る。

この男は、心やさしい奴なのだ。

ただ、素直になれないだけだ。

今の言葉にも、ジョンを巻き込みたくたいという思いがある。

・・・・・・・・・・・・・・・・この男の隠れたやさしさに気づいたのは、

いつだっただろうか？

「うむ。私はそろそろ能力を発動させようか」

「ああ。すまん」

「何の……これもすべては悲願のためだ」

「……」

ダリオンは、敵の陣営を食い入るように見ている。隙がないか探しているのだろう。

「……ダリオン。お前と……友になれてよかった」

「……俺もだ」

二人はそれだけ言うと、自分のいるべき場所へと別れて進んでいった。

「……………」

さすがは、ジョルン将軍が鍛え上げた精鋭だった。

あの騎馬隊は見事なものだ。中央の歩兵部隊に突っ込み、こちらが応戦する間もなく、見事に離脱していく。

ダリオンは直後に直属の5千で、追い打ちをかけようとした。

しかし、それに対しても、新たに出てきた騎馬隊が見事に牽制してくるため、思うような成果がだせない。

ダリオンは、全身の血が熱くなるものを感じていた。怒りではなく、高揚だ。

これこそ、戦だ。

自分が望んだ……

右翼、左翼の軍は数が多いが、農民あがりの信者が多い。

勝つためには、この中央の精鋭で相手を突き崩し、快走させるしかない。

だが、あの騎馬隊に勝てるのか？

「……くくくく、何を言っているのだろうな。俺が弱気になるとはな。小僧に笑われてしまうわ」

ダリオンは、自らが鍛え上げた精鋭たちを見る。

（こ奴らを信じずに何を信じる）

ダリオンは馬上のまま、大声をあげる。

「突っ込め！！！」

叫びながら、ダリオンは剣を振って合図を出した。

敵軍からも、騎馬隊が出てきた。

おそらく、若い将校なのだろう。

動きがまだ固い。

ぶつか。る。

その寸前に、ダリオンは馬の速さを落とす、後ろの味方の騎馬隊に自分たちを追い越させた。そして、敵軍を包み込む。

ダリオン自身、二騎^馬を斬り落とした。

馬を返して、また突撃しようとしたが、もう一度切り結ぶ余地はなかった。

敵が去っていく。こちらの犠牲はほとんどない。

「どうだ、若造が……野戦とはこうやるのだ……！」

そこで、敵の全軍が進軍を開始し始めた・・・小競り合いは終わ
りだ・・・ここからが本当の戦いの始まりだ。

[illegible]

||
||
||
||
||
||

11
11
11
11
11
11
11
11
11
11
11

ぶつかり合いはすでに、3日目になった……

さすがは、神聖帝国の精鋭だ……

これで崩せると、という攻撃をかけても、踏みとどまる。

押しこんだと思っても、やわらく受け止められ、いつの間にか立ち直っている。

魔法を封じても、ここまでの用兵……さすがは、ジョルン將軍・
……

「右翼に、敵の騎馬隊が回りこみました!!」兵がいった。

朝からのぶつかり合いは、歩兵の押し合いだった。

それはこちらに不利で、いつの間にか押し込まれている。

どこで騎馬隊を使って、敵を打ち崩すか……ダリオンが3日間
考え続けていることだ。

はじめは、突撃して正面突破をはかった。

突破はしたものの、敵の陣を二つにしたということにすぎなかった。
すぐに元通りになっている。

そして、今敵の騎馬隊の一部が右翼に回り込んできている。

だが、ほおっておいた。

中央の本陣から突然、騎馬隊が突然現れた。その旗を見て、ダリオ

ンは驚愕する・・・

「ジョルン將軍の旗だと??」

見間違いかと思った。だが……間違いはない。

自分の首だけを獲ろうとしている。それが、ダリオンにははつきりとわかった。

およそ、5千騎……見事な騎馬隊の動きだった。

「……ここが正念場だ！！行くぞ！！」

自分の直属の騎馬隊を率いて、突っ込んでいく。

[illegible]

敵の騎馬隊の動きは、まさに変幻自在だった。

何度も、何度も、ぎりぎりの所ですれ違う……

死に物狂いで、**ダリオンは正面からジョルン將軍に突っ込んだ。**

すると、避けるでもなくジョルン将軍も全軍で突っ込んできた。

ぶつかる時、ダリオンのまわりは騎下がしつかりと固めていた。

それでも、敵は突き進んでくる。

ダリオンも、駆けた。

騎下の兵が次々と斬り落とされている。

ジヨルン將軍！！

馳せ違った。

手に・・・・・・・・・・

斬った感触は残っていた。

ジヨルン將軍の軍勢は、駆け去っていく。

斬った感触はある。

だが、致命傷までいつているのか・・・・・・・・・・

「さすがです・・・ジヨルン將軍！！」

その時、気づいた。

自分の胸から一本の槍が突き出している。

すでに、致命傷であることが明らかだ。

死など……あつけないものだ。

「ふん！こころで、終わり……か……」

そのまま、ダリオンは馬から崩れ落ちた。

[illegible]

ルーウィンは陣営の奥で、集中して能力を極限にまで広げていた。

そこに、信者が駆け込んでくる。

「神王様！！・・・ダリオン様、討ち死に！！我が方の軍勢は、総崩れです。お逃げ下さい！！神聖帝国の軍勢が迫ってきております！！！」

それを聞き、能力の発動をやめ、瞑っていた目を開く、ルーウィン。

「……………そうか……………ダリオンが逝ったか……………」

まったく動く気のないルーウィンに慌てる信者。

「神王様！！お逃げください！！」

「……うむ……すべて……終わった……」

「神王様！！」

すつと立ち上がる神王。

「松明を持て……」

「神王様……」

「松明を持て!!」

「……は!!」

そのまま天幕を飛び出していく信者。

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃 〃

天幕にある、壺を手に取り、中の液体を周りにぶちまける。

そのまま松明を、投げ捨てる。

液体に引火し、周りはあっという間に火の海となる

「……地獄の業火はこんなものではないだろうな……私
には、こんな死に方がふさわしい……生きる……」

ルーウインの姿は、真赤な炎の中に消えていった。

ルーウィンとダリオン（後書き）

感想・意見ありましたら、送ってください、励みになります

文字（前書き）

え〜楽しんでいただけてるでしょうか？ではどうぞ〜

文字

「……………そんな」

カイから、神聖帝国軍と神王軍との闘いの顛末を聞いたジョンは掴みかかっていた手をはなし、愕然とした表情で床に膝をつく

（……………ルーウィン様とダリオン様が死んだ？……………自分が必ず護り抜くと決めたのに

なぜ……………自分にこんな仕打ちをするのですか？……………なぜですか！……………ルーウィン様……………ダリオン様）

そこにカイ師匠の声が聞こえてくる

「……………ジョン……………つらいと思うが聞いてほしい。実は二人から手紙を預かっているんだ。受け取ってくれ」

と、手紙を差し出された。自分の学のなさをここまで呪った日はない。自分は何とか絞り出すように言葉を発した

「……………カイ師匠。自分は……………字が読めません。お願いします。どうか……………どうかここで……………読んでください」

しばらく黙っていたカイ師匠であったが、

「……………分かった……………いいんだな？」と言ってくれた

「……………はい」

カイ師匠は手紙を開いて、声に出し始める

「……ジョン・許……」と、お二人の最後の言葉を語り始めた

[illegible]

ジョン：お前にした事を許してほしい。

だがな……私はお前に語ったような人間だ。汚く、卑怯な男なのだ

お前に護ってもらうほど、価値がある人間ではないのだ

カイ將軍とレン殿からお前の様子を聞いた。

お前には武術に関して天賦の才があるそうだ。このままお二人に教えをこえば、さらなる高みへと進むはずだ。

その力があれば、多くの事ができるだろう

将来…困っている人を数多く救うことも。

自らの選んだ王へと仕え、騎士になる事も可能だろう。

——さらに：「王」となり国を建てることも、もしかしたらできるやもしれん。

——お前は、無限の可能性に満ちているのだ。

——お二人についてゆけば、人の道を踏み外す事もないだろう

——ジョン…お前は真面目で、正直で、努力を怠らない子だ

——そんなお前の未来を奪うことなど私にはできないのだ

——人生は思うさま生きてみないとつまらない……自分の信ずる道をゆけ！！ジョン！！

.....

——初めルーウィンがお前を拾った時、こいつは何を考えているんだと思った。

——その頃のお前はいちいち暖炉を見てははしゃぎ、小さなパンに涙を流していたな

——子供というものはうるさく、うつとおしい存在だと思っていた

——お前は知っているだろう。俺は結婚もしていないし、子供もない

——俺の嫁は戦だ。そう決めた。いつ死ぬとも分からぬ身だ。悲しい思いなどさせまいとな

て……自分よりうまいものなど山程いるじゃないですか

武術だって！！お二人のために……学んだのです！！それなのに……それなのに！！

ダリオン様！！……いつもみたいに……叱って下さい！！……怒鳴って……くださいよ！！）

ジヨンは床を見つめることしかできない。そこにカイ師匠の声が聞こえてくる

「ジヨン・これは君のものだ」

と、手紙を手渡された。それをまるで触れたら壊れてしまうものを扱うように受け取るジヨン。

（……………お二人の字だ……………読めないけど……………自分には分かる）

「……………カイ」

レン師匠がカイ師匠に話しかけている

「ああ……………ジヨン俺達は少し出てくるよ……………じゃあな」

といって二人は部屋を出ていく。

目から涙が溢れてくる……………止められない……………止めようとも思えない

嗚咽がどうしても出てしまう……………自分は……自分は……

・
・

そして扉が閉まり

自分は

一人きりになった

文字（後書き）

誤字・脱字ありましたら。意見・感想待ってます。励みになるので

旅立ち（前書き）

え〜〜〜見てやってください

旅立ち

ぎー、と扉を開ける。

あれから……ルーウィン様とダリオン様の手紙を受け取ってから、
どれだけの時がたっただろう

外はすでに深夜となっている。月の光が闇夜を少しだけ照らす。こ
こがどの辺りなのかはよく分からない。だが、森を抜ければいくら
でも軌道修正できるだろう。

自分がついたときにそこにいなければ、一度も行つた事もない神聖
帝国の帝都に行くまでだ。

ざつと地面を踏みだす。

「……やっぱり、行くのかい？」

すると後ろから気配もなく、声をかけられる。自分の師匠だ……
初めてもった。

「はい」

と、すぐに返事をする。決して振り向かない。自分の進むべき道は
こちらなのだから。

「神王やダリオンは、ジョンに生きてほしいと願った……それ
は俺も同じだよ」

カイ師匠は少し悲しそうに話しかけてくれる。

（わかっています……………あの手紙の意味も……………お二人のやさしさも……………でも）

ギュッと拳を握りしめる。未来になど興味はない…自分は今を思うさな生きてやろう

「申し訳ありません、カイ師匠。それでも自分は……………行かねばなりません」

自分の気持ちを素直に話す。

「……………力づくでお止になりますか？」

師匠が本気になったら、自分に勝ち目はないだろう。だが、もし止めるなら死ぬ気で戦うしかない。

だが、そんな自分の心配をよそに…

「そんなことはしない。ジョンの気持ちが分からないわけじゃない」と言ってくれた。

「……………感謝します。」

自分は闇夜に向かって歩き出す。すると、目の前に何者かがあらわれ、自分の前に立ちふさがる。

暗闇でもわかる・・・燃えるような深紅の髪。顔の下半分をマスクで隠している

「……………」

「…レン師匠」

しばらくじつと見つめられた。自分もじつと見つめ返す。決して目を逸らさない。

すると、黙って何かを手渡される。

「……………知り合いにうつてもらった。受け取れ。」

それを受取り、包みをとってみる。そこにあったのは、漆黒の槍。

レン師匠の槍にも、決して劣らない見事な槍。

きれいな……………カイ師匠の髪の色のような……………漆黒の黒。

レン師匠は自分を通りすぎる時……………ポンつと肩に手をのせてくれた

「俺達からの贈り物だよ。受け取ってくれるかい？」

「……………弟子が師匠を超えずに死ぬ。それは一番の無礼だぞ、ジョン。」

泣きそうになった。お二人には本当にお世話になった。今生の別れになるかもしれない。

ジョンは振り返り、二人に深い深い一礼をする。

「短い間でしたが、ありがとうございました！ー行ってきます！ー」

「……………ああ」

——あくまで冷静なレン師匠。

「ジョン……………思いつきり…暴れてこい」

——最後までやさしい、カイ師匠。

「はい！ー」

と、もう一度返事をする。

——目的地を目指す

——神聖帝国軍がいる——ゴーラス

平原へ！ー！

旅立ち（後書き）

感想・意見待ってます

ジョン

「来た・・・・・・・・」

ジョンの目の前に、数万の軍が並ぶ・・・・・・・・10人、20人の守備隊はすでに何度も蹴散らした。

ジョンの後ろには、アーツ神に大きな黒いバツ印。

神王の旗が堂々と、風になびいている。神王の旗がいつまでも、こんな城壁の外に立っているのは迷惑な話のはず。

数万の軍勢。

中央の軍の・・・・・・・・精鋭中の精鋭の出撃だろう。

予想外ではあるが、望むところだ。

ジョンは中央の本陣。大将のいる場所を確認する。

あそこまで

手に漆黒の槍を持ち、懷に手紙を大事そうにしまい込む。そして目を瞑り心気を落ちつける

軍勢のほうで、進軍の合図があった。前衛が雄たけびをあげ、攻め寄せてくる。

ジヨンは漆黒の槍を構えて、そこに炎の魔力を注ぎ込む

(……ルーウィン様……ダリオン様)

そのまま……万の軍勢に躍り込んだ。

[illegible]

「……信じられん」

ジョルンは、自分の目が信じられなかった。

たった一人の少年が神聖帝国の精鋭を次々となぎ倒して進んでいく。

「
く……化け物か」

総大将のクレアが、一人に対して数万の軍での出撃を決めたときは、馬鹿な小娘だと思ったものだ。

神王との戦で、全軍の指揮をとれなかったから一度でもしてみたいという、思惑が丸わかりだった。

だが・・・結果として正しかったといっている。

中途半端な軍勢では全滅もありえただろう。

「何ですか、あれは……！止めなさい……！ここまで、辿り着いてしま

いますよ!!」

クレアは怯え、慌てふためいている。

当然だ。あれに、恐怖を覚えないほうがおかしい。

すでに何人がなぎ倒されているのか

かつてこの神聖帝国を立ち上げた初代の王……………スタンニス・グランワール

彼は真の英雄であり、何万という敵軍に一人で突っ込み、撤退させたという

子供の頃……………聞いた時は自分でも胸が躍り、そのような英雄に憧れたものだ

だが……………歳を重ね、武術を学び、戦に出るたびに所詮は戯言だと思っようになった

英雄伝など、脚色があって当然なのだ……………大袈裟に書かれただけだ

しかし

目の前の光景をじっと見つめる

ゾクッと体が震えた

馬鹿げた話だが……………ここまで来るやもし

れん。

「そうです！！矢です！！神王の軍勢には、魔法は効きませんでしたが、矢は有効でした！！矢で遠方から射るのです！！」

思い立ったように叫ぶクレア。

「クレア將軍・・・相手は一人であり、それを我が軍が取り囲む形です。味方に当たってしまいます。矢は使えません」

と、ジヨルンはクレアを諫める。

だが、返ってきたのは予想だにしない答えだった。

「構いません！！」

「な！！」

「味方ごと射なさい！！」

「何を申されます??」

バツとジヨンの方を指さすクレア將軍。

「あれを見なさい！！もはや、あんなものは人ではありません！！あれこそ神王の切り札に違いありません！！ここで何を犠牲にしても止めるのです！！」

と、指をさすクレア將軍。

「しかし！！」

バンッと机をたたく。

「ジョルン副将！！この戦闘の総指揮は私にある！！口を挟まないでもらいましょう！！誰か、ある！！」

（自分が丹精こめて鍛えた精鋭が味方の矢にかかる……………だと！）

ジョルンは拳をきつく握りしめた。

ジョ		
ン		

||

ジョンは、跳躍した。目の前に現われた3人を、着地と同時に突き倒す。

5人、6人が左右から、斬りかかってくる。

さらに突く。

2人突き倒すので、精一杯だった。

3人目を倒そうとすれば、自分が致命傷を受けていただろう

「ちゅうい——！！」

槍を思いっきり振り回す。

何人かがなぎ倒される。

ジョンは一度、大きく息を吸った。

敵をつつきるようにして、飛び込み。

さらに2人倒した。

息があがっていた。

しかし、レン師匠の鍛練の時ほどではない

ジョンは腹の底から、雄たけびを上げた。

突き、走り、転がり、跳躍し、立ち、なぎ倒す。

既に、何人倒したのか分からない。

（あと少し）

数人を槍でなぎ倒しながら突き進む。

（もう少し）

一歩、また一歩と進んでいく。

その時、ジョンは見た……………

かない。

——体がうまく動

つとだ。

——立っているのがや

ゴフっと——口からは血が、噴き出してくる。だがジョンは本陣の方をじっと見ている。

また空が

——大量の矢で埋め尽くされる。

「うりゃああああ!!」

口から血を飛ばしながら、その漆黒の槍を高速回転させ、何本も叩き落とす。

だが、それでも数本の矢がジョンに突き刺さる。

「ぐー!!」

ふら……ふらつ……と体が揺れたかと思うと、ガクつと両膝をおり地面に倒れそうになる。

だが、それを槍をガシッと地面に突き立て、杖代わりにしてまた立ち上がる。

そして…一歩一歩近づいていく。

また――空が大量の矢で埋め尽くされる。それをゆつくりと見上げるジヨン。

（…ハア…ハア…もう避ける体力も気力…残ってない）

上に放たれた矢が弧を描き、自分にめがけて急降下してくる

「――ダリオン様

――ルーウィン様」

――目の前まで迫りくる大

量の矢

「――今――参ります」

そして――ジヨンの体に大量の矢が吸い込まれていった

ジョン（後書き）

感想・ご意見ありましたら

エピソード（前書き）

え〜おもしろくなかったようで、すいません。最後ですので・
どつぞ〜

エピソード

ジョンは目覚めると不思議な場所にいた。

自分はさっきまで神聖帝国の軍勢と闘っていたはずなのに

辺り一面が、白い花で埋め尽くされている。地平線の彼方まで花で埋め尽くされている。

とてもきれいな場所だ

「ここはどこだろう？」

ジョンは何がなんだか分からずに、ただそこで呆然としていた。

だが………ありえない事が起きた。

「ふむ。やはり、ここまで来てしまったか」

「ふん！ー！」

その声にはっと、後ろを振り向く。そこには、ダリオン様とルーウィン様が立っていた。

ジョンは自分の見ているものが信じられなかった。ゴシゴシと何度も何度も目をこすってしまう。

しかし、何度みてもお二人が……最後に会った時と同じ姿で目の前

やるのか？」

「ああ。小さい人間というものは……どこまでいっても小さいままなのだよ。……死んでも治らん」

「おもしろい！！俺も一度ぶん殴ってみたいと思っていた！！」

と、うれしそうに笑い合うお二人。ジョンはいつものように横で控えている。

ルーウィン様がこちらを振り向く。

「ジョン——一度しか聞かんぞ——いつしよに来るか？」

——差し出されるルーウィン様の手。

——あの雪の日と同じように

自分の運命を変えた手。

ジョンはその差し出される手に——手を伸ばし——
かりと握った！！

「はい!!お二人にどこまでも……………ついていきます!!」

自分に救いの手を差し伸べてくれたのは

神——などではなく

——この

——神王なのだから

エピソード（後書き）

感想とかあったらぜひに欲しいですね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4832j/>

王たちの宴 S e c o n d 神王編

2010年10月8日11時15分発行